

日本植物園協会ナショナルコレクション申請書

新規申請

更新申請（認定番号 016 認定期間 2023 年 3 月 17 日～2028 年 3 月 16 日）
（いずれかに)

■申請年月日

2022 年 10 月 27 日

■コレクションのテーマ

国営武蔵丘陵森林公園サクラソウコレクション

■申請団体・申請者名

国営武蔵丘陵森林公園都市緑化植物園（森林公園里山パークス共同体）

■申請団体の代表者名（個人での申請の場合は不要）

非公開

■申請団体・申請者の連絡先（住所、電話、メールアドレス）

非公開

■コレクションの所在地（コレクションが分散している場合は主たる所在地）

埼玉県比企郡滑川町山田 1920

国営武蔵丘陵森林公園内

■現地審査希望時期

2023 年 4 月 10 日 ～ 2023 年 5 月 10 日

希望する理由：サクラソウが開花する時期であるため。

■コレクションのテーマ

国営武蔵丘陵森林公園サクラソウコレクション

■コレクションの概要

国営武蔵丘陵森林公園（以下、当園）は、明治百年記念事業のひとつとして計画され、1974年7月に開園した全国で初めての国営公園である。都市緑化植物園は、当園のほぼ中央に位置し、都市住民の都市緑化意識の高揚、植栽知識の普及等を図ることを目的に1975年度より建設省（現国土交通省）によって調査・設計が進められ、1978年度に開園した。

サクラソウの園芸栽培が盛んになるのは江戸時代からで、元々は荒川の上流域に自生していたものが、氾濫により流され江戸の原野に群生するようになり、人々の目に止まったことがきっかけとされている。

江戸時代中期（1700-1750年ごろ）から末期にかけて、さくらそう連が結成され、品種改良・栽培が盛んに行われた。江戸末期には専門書である『櫻草作傳法』が記され、桜草花壇による観賞方法が確立するなど、サクラソウ園芸はひとつの完成期を迎えた。明治時代（1868-1912年）になると海外のサクラソウ属の栽培品種が輸入されはじめ、人気は衰退し作る人も少なくなったが、熱心な愛好家の間では新品種の育成などが行われ続けた。太平洋戦争（1941-1945年）になると、戦災により壊滅的な状況となったが、愛好家による努力の結果、主要品種は奇跡的に絶滅を免れた。戦後の本格的な復活は、1952年4月に江戸時代のさくらそう連の遺産と伝統を受けついで全国的な集まりとして「さくらそう会」が発足されたことに始まる。同会の活動によりサクラソウは全国的に普及し再度隆盛を迎え、現在に至っている。

さくらそう会の活動は1. 種苗の配布・交換、2. 栽培技術の指導、3. 品種の保存普及、4. 品種の整理統一など多岐にわたっており、その中の重要な事業のひとつとして挙げられているのが「4. 品種の整理統一」である。300年近い栽培の歴史の中、震災や戦災などの社会的混乱により生じた、品種の取り違えや名前の重複などを品種の特徴に基づいて分類し「さくらそう会認定品種」（以下、認定品種）として整理を行った。現在、認定品種は322品種ある。

当園におけるサクラソウのコレクションは、2000年に個人の愛好家から124品種の株を譲り受けたのを契機に開始された。2004年からは展示に活用され、以後、一部の品種については生育不良で消失しつつも品種数を増やしながらか、現在では認定品種261品種並びに野生品7系統のコレクションを保有保存している。本コレクションは交雑受粉を防ぐため、種子の結実前に花柄を摘むなど増殖は株分けのみで行っている。普段は公園内の第2苗圃にて管理を行い、品種の保存・育成に務めている。

サクラソウが開花する4月下旬頃には、都市緑化植物園展示棟前休憩広場に特設の展示スペースを設け、桜草花壇による伝統的な観賞手法での展示や、さくらそう会より講師を招いてサクラソウの歴史や栽培等についての解説等の催し物などを実施するなど、さくらそう会と連携しながらサクラソウの普及啓発に努めている。

【参考文献】

- ・鳥居恒夫 著 花図鑑 桜草・続編 さくらそう会（2019）p. 97-99.
- ・鳥居恒夫 著 色分け花図鑑 桜草 第3刷 株式会社学研教育出版（2011）p. 192.

- ・鳥居恒夫 著 さくらそう 日本テレビ放送網株式会社 (1975) p. 151.
- ・さくらそう会ホームページ www7b.biglobe.ne.jp/~sakurasou/index.html

■申請者が保有するコレクションの種数、品種数、個体数（保有植物リストおよび写真は、別紙「保有植物リスト・写真ファイル作成要領」にしたがい提出）

「認定品種」

品種数： 261 品種

個体数：各品種、さくらそう会指定の桜草鉢 3 鉢、及びその他の鉢数鉢（ビニールポット含む）。

「野生品」

系統数：7 系統（上尾、戸田、大子紅、松尾白、錦が原、由布岳、八ヶ岳）

個体数：各系統、さくらそう会指定の桜草鉢 3 鉢

■申請するコレクションのこれまで報告されている総数と申請者が保有する数

- ・さくらそう会認定品種数 322 品種のうち、当園保有品種数 261 品種。
- ・野生品約 200 系統のうち、当園保有系統数 7 系統。（鳥居恒夫 著 色分け花図鑑 桜草 第 3 刷 株式会社学研教育出版（2011）p. 156. ）

■コレクションの栽培管理状況（所在地が分散している場合は、ここに全てを列記）

- ・当園の苗圃において専任の栽培担当職員 2 名体制で管理を実施
- ・鉢はビニールハウス内で管理。夏期はハウス内に遮光ネットを展開し育成
- ・灌水は通年実施。春から秋にかけてはほぼ連日行い、冬は状況を見て実施
- ・12 月から翌年 1 月にかけて株分けを実施。4 月下旬頃からの展示に備え育成
- ・5 月上旬、花期終了後、受粉による交雑を防ぐため、種子が結実する前に花柄を除去
- ・5 月上旬から 6 月下旬にかけて、10 日に 1 回程度、液体肥料を施す
- ・昆虫による食害に関しては、基本的には捕殺で対応し薬剤の使用は極力抑えている

■コレクションの導入記録及びデータベース化の状況

- ・さくらそう会認定品種一覧表に基づき 2001 年からデータベース化し、毎年枯死等の状況を確認し更新を実施。

■コレクションのラベル表記状況（栽培管理用ラベルや展示用サイン・ラベルなど）

- ・さくらそう会の協力により、品種同定および確認を行い、正確な管理に努めている
- ・栽培用ラベルおよび展示用品種名ラベル設置
苗圃での育成時はプラスチック製ラベルを使用。ポット苗には認定番号のみ表記。
展示用鉢物には認定番号・品種名・品種名読み（平仮名）を表記。
展示時に、鉢物のラベルを品種名・ルビを縦書きで表記された木製のラベルへ変更。

■コレクションへの協力団体・協力者（種名の同定、導入など）

- 品種同定および解説などのガイドをさくらそう会へ依頼。
導入当初より 2021 年までは、さくらそう会事務局の鳥居恒夫氏にご協力をお願いしてい

たが、後任としてさくらそう会会員の伊丹清氏をご紹介いただき、2022年以降は伊丹清氏にご協力いただいている。

■コレクションの長期保存のための方策と体制（増殖、栽培管理上の工夫、栽培技術者や後継者の育成、危険分散等）

- ・品種保存のため、種子が結実する前に花柄を撤去。増殖は株分けのみで実施
- ・株分けを行う際は、株が他の品種と混ざらないように1品種毎に注意を払いながら実施
- ・毎年株分け時は、品種ごとに3鉢ずつ作成。
余剰苗は2006年頃より展示イベント期間中に来園者へ配布。
また、今後、危険分散の為サクラソウを管理育成している団体や施設などとの苗の交換・分譲を検討。
- ・管理は直営スタッフによる体制をとり、新規スタッフにはベテランスタッフの実践指導による教育を実施。

■コレクションの公開の現状と今後の方針、これまでの広報・利用実績（研究等を含む）

- ・当園で管理しているサクラソウの開花期間に合わせて「さくらそう展」として、2004年から毎年、20年近く開花株の展示を行っている。
- ・桜草花壇による展示や花の形の違い、色の違いなどについて解説したパネルを設置しサクラソウの普及啓発に努めている。その他、2006年頃より展示イベント期間中に来園者へ余剰苗の配布を実施。
今後は、余剰苗を使用した、育て方教室等の体験イベントも実施予定。
- ・広報実績
 - 《2015年4月》（テレビ）J:COM熊谷、（雑誌他）はなとやさい4月号
 - 《2016年4月》（WEB）サカタのタネ 園芸通信
 - 《2017年4月》（WEB）朝日新聞デジタル、ZAQおでかけガイド他9件
 - 《2018年4月》（WEB）Yahoo ロコ、朝日新聞デジタル他9件
 - 《2022年4月》（WEB）BIGLOBE旅行、Walkerplus（KADOKAWA）他7件

資料写真

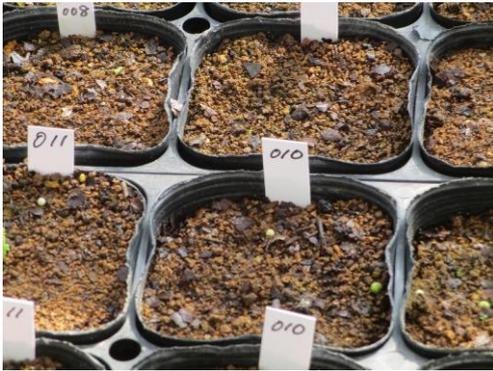


写真1：育成時ラベル（ポット用）



写真2：育成時ラベル（鉢用）



写真3：展示用ラベル



写真4：展示状況1（2022年4月）



写真5：展示状況2（2022年4月）



写真6：展示状況3（2022年4月）



写真7：講習会実施状況（2022年5月）講師：さくらそう会 伊丹 清氏